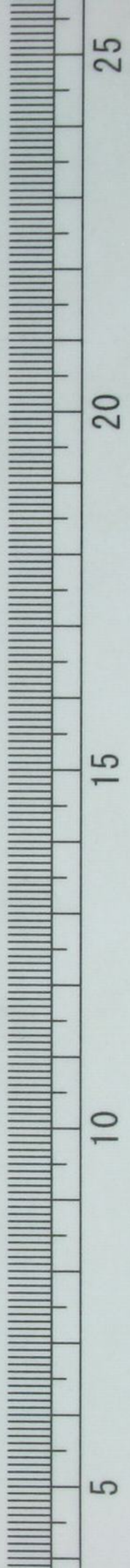


沼尻維一郎編輯
西南太平記

六号
下



A424
10

西南太平記六編卷之下

東京 沼尻絰一郎編輯

中津の縣廳に防戦す

第十二回

并鹿兒嶋女隊の繰出し

却説三月二十七日ハ賊徒の方より曩も乗取
壘と目掛く襲ひ来ると官軍を之れを逐退け
午前十一時不至り砲火を以て木留村を焼拂ひ
程に炎の光り焰々と燃上り天を照らす火勢

西南太平記

六編下

48-7773

小飛散る弾丸雨霰の如くその中へ賊徒の屈せず奮戦す又八代口の昨今高瀬の本營と互に声息を通し盛んよ小蒸瀨よて往來を開き山川大佐の砲工隊を率ゐ同地不到るとまゝ熊本城の或日城兵數多植木口は切て出奮撃突戦の最中賊軍の別隊不意に官軍の背後より起りて城に入りたりとの説あまど信トがと一その故に曩小圍を受け内情を通ずる能は

ざるがゆゑ剛勇不屈の兵士と選び窺うよ城を出して我が營に遣らんとすると殆と十五回よあよびよとと皆賊徒の為よ捕と一や我軍よ達する能はざるよ又去る三月上旬のころ旧長崎縣令宮川房之の故郷の肥後熊本よ退隠して居られしが鹿児島より暴徒が當縣下へ繰り込こ一騒ぎよつけて同所の暴士族が二人宮川の郎へ推参し金三十圓と借用りし一度と申せしに

断られしとう宮川氏のその夜舊知事の郎へ推
参し返る途中は何者とも知れず面躰と包と
一狼籍との前後より斬てかりけきをを宮川を
左りへ退き手早く身がまへせしところへ一人無
三又衝き倒さんと一人の刀と抜き拂ひ矢庭に刺
殺さんとせしゆな宮川の杖よてあまを追ひ
たうひしうども不意と討れ數ヶ處の深手を
負ひ自宅へ歸り治療せしめ死去せしとも云ふ

又去る二月二十七日熊本鎮臺第十三聯隊中の
伍長谷村計介ありその密使となりその夜窺
り又城を出で谿を越へ岨に攀り賊の營所を
過ぎて吉次越え達せし時捕へらまたりと小
倉の懲役人ありと偽り辛くて刀下と免られ
賊に驅役せられ漸く虚を窺ひ脱走し三月二日又
りし我十四聯隊の陣營に達し具に城中の内
情より糧食の多寡等を語る然聞く依て翌三

三日軍議一決して此の士卒を嚮導して進
 軍したるが憐れむべし士卒の銃丸も中りて戦
 死したり又吉次越の手合への官軍賊軍互に進
 江田少佐が者とも進めあれ見へるの大將篠
 原ありまれ打てとととと一聲の下知も兵士の忽
 地篠原と銃砲も打ち抜き江田少佐も賊の
 弾丸も打たれて死なるといふ爰もあいて初
 めて城兵の艱苦もよび敵情も知り得るが矢張

熊本城へ旭紅の旗章翻翻として要害險固ふ
 守らるしとさて福岡の暴徒は三月二十八日に旧
 城の新屋敷と谷間春吉中洲東川端とへ火と掛
 け翌二十九日の金武村を焼拂ひ夫れより城下小
 姓町と銃砲町とを焼拂ひ夜も入つて吉塚村へ
 も火をかけ鎮臺兵が大砲を打ち出し四方へ
 追ひちらせしと福岡の騒動も追々静謐み
 りり縣廳より難波入へて手當と下されまづ博

宮川氏夜
路之狼藉
又出逢ふ



多々豪家中村清蔵ハ此騒動よつき焼失の場へ金
 六百日と恵まきたり又舊佐土原藩知事島津忠
 寛の三男啓次郎ハ今年二十三まで幼少の時よ
 り豪邁の性質ゆゑ武藝ハ勿論讀書ハ人よ勝
 れ常ニ遊むれりよ由高木より飛たり或ハ飛
 上りなるともなり好々勇氣さくんとて頗る
 慷慨家より時勢を憂ひ此の如きより西郷暴
 拳と聞き我ハ島津一家あるまを西郷ハ他人

で無く是非とも此の度ハ一戦一死人の山と越
 と見ると何れ血氣の蒼蒼者ゆゑ二百人餘を呼
 集め西郷隆盛ガ許へ走り来り一手の防ぎを致さ
 んと言ひ出す西郷より啓次郎殿ニ加勢ハ頼
 申さば此方ハ拙者ガ一手限りまで勝てば一負
 れを再とび本国へ歸らぬゆゑ君より東京ニ歸り
 猶學術を修業成され天下の用ニ立べ一則義
 務ありと西郷ニ諫められ一が元々血氣の英勇

ある也及ナニ是^{これ}まで支^し度^どとして空^{ひら}く東京^{とうきやう}へ
歸^{かへ}るま^まとくと此^この二百人餘^よの死^しと共^{とも}せん^と日^{ひら}
向^{むか}を陣^{じん}所^{じよ}と定^{さだ}め名^なも無^ない軍^{ぐん}と始^{はじ}り若^{わか}氣^けの
至^{いた}りとい^いふ^ふり^りの^の人^{ひと}は概^{おほ}して賊^{ぞく}徒^とと呼^よべ或^ある
人^{ひと}が涙^{なみだ}を流^{なが}せしと^とい^いふ

説^{せつ}曰^{いは}く啓^{けい}次^じ郎^{らう}ど^のの^の豪^{ごう}氣^きあ^いて寒^{さむ}中^{ちゆう}水^{すい}の
中^{なか}へ飛^と入^いり荒^あれ^れ々^々き^きと好^{この}む十三^{じふ}四^し支^しの^の時^{とき}兄^{あに}
上^う洋^{やう}行^{かう}して居^ゐら^らざ^ざと慕^もつて外^{がい}国^{こく}へ渡^{わた}航^{かう}

され彼^かの地^ちよ^よて学^{がく}問^{もん}とを^をげ^げと去^き年^{ねん}東^{とう}京^{けい}へ
歸^{かへ}ら^らま^まと^と貧^{ひん}書^{しよ}生^{せい}の^の風^{ふう}と^とる^る破^{やぶ}れ^れ着^ぎ物^{もの}で
更^{さら}に厭^{いと}を^をず外^{がい}ら^ら夜^や中^{ちゆう}遅^{おそ}く歸^{かへ}られ戸^とが閉^し
てあると蹴^け破^{やぶ}つて這^こ入^いるとい^いふ荒^あれ武^ぶ者^{しや}ある
島^{しま}津^つ忠^{ちゆう}寛^{かん}公^{こう}が鹿^か兒^に島^{しま}の^の島^{しま}津^つ公^{こう}より招^{まね}られ
て昨^{きの}年^{ねん}彼^かの地^ちへ参^{まゐ}られ^れたる^るよ啓^{けい}次^じ郎^{らう}の^の跡^{あと}
と慕^もつて佐^さ土^ど原^{げん}まで行^いく^く旧^{きゆう}領^{りやう}地^ちで日^ひ々^々
山^{やま}獵^がを^を樂^{たの}し^しむ二^に日^{にち}二^に疋^ふの^の馬^{うま}と乗^のり殺^{ころ}され

日向ひらたけでの小西郷こさいごうと唱となへるといふ

此この啓次郎けいじらう日向ひらたけ本陣ほんじんとまへ人数じんずを募もつらん
とせし日向延岡ひらたけのぶらの舊藩士きうはんし三派さんぱい分わかれて西郷さいごう
と信しんじて生死せいじを俱ともせんとす者ものと大義たいぎ名分なぶん
と誤あやまらぬ正義せいぎの者ものと民権みんけんを唱となふる書生黨しよせいとうと
三派さんぱい又また互たがひに議ぎせしが遂つひに西郷さいごうと信しんずる徒とへ
脱走だつそうして賊軍ぞくぐんに力ちからつり田原坂たはらざかの戦たたかひに趣おもむき田原
坂たはらざかの賊壘ぞくらいの下したに延岡藩のぶらはん弾薬箱だんやくばこと印しるししてある

箱たばこが何なにれとつり又また豊前中津ぶつぜんなかつの暴徒ぼうと其地そのちの
士族しぞく三十人さんじゆにんをりりと千束せんぞくの士族しぞく十人じゆにんをりり此この
暴徒ぼうと又また一ひとと代官だいかん人ひとが同どう三十一日さんじゆいちにち午後十二時頃ごふじふにじごころ
三発さんぱつの砲声ぱうせいと合圖あひづに喇叭らふたを吹ふき立たて市中いちぢう一軒いっけん々々へ
発砲はつぱうし支廳しちやうへ乱入らんにゅうし官員くわんいん宿直しゆくぢくの界田さきと讓やうを殺ころ
し銃器しゆき弾薬だんやくを奪うばひ廳中ちやうちうへ放火はうかして残のこらず焼やき
拂はらひ三人五人宛さんにんごにんをん四方しやうほう分わかれ官員くわんいんの邸宅ていたく警察署けいさつしよ
等らへる乱入らんにゅうして多おほ人数じんず殺害せつがいし掛屋村かけやむらの小畑利こさへり



石南六三言

六編下
七



町田啓次
郎 屢々 田
領地 山
嶺 とも

石南六三言

四郎方へ迫り租金と奪ひ其外市中所々ふく
金田と奪ひ取り舊城大手門外も勢と纏め撤
文とバ讀こ上げ入獄の囚人と赦して人足に遣ひ
是も銃器弾薬などを取り持せて午前二時頃又
二手に別れ一手は四日市の本道より一手は高
田道の海岸通りよりして豊後路も迎ひ大分縣
廳を襲ひ阪梨の巡查隊の後とらち薩賊不應
ずるつゆりまどろりふ翌日の高田と立石まで午飯

とつかひ四月二日の午後一時過ぎ大分縣下の
市街の入口を放火し本廳を砲撃せしゆ本廳
ふて是も應下防戦し午後六時頃も撃退きしが
賊徒は引上げまがら懲役所へ放火し午後十二時
ころ別府村まで落たるよ三日の朝軍艦より上
陸せし二小隊の兵と巡查の爲も激しく討ち敗
られ佐伯日出の方へ走り其地の士族を煽動さ
るとり思ひきや此暴挙も及ぶ者の巨魁は増

田宋太郎と後藤純平とふり又静岡縣士族の
春岡知了と言ひ元鎮臺病院のお雇ひありしが
先頃賊徒の為み捕へられ其黨の糺問掛り淵邊
仁禮の兩人ふ糺さまゝ上渡したる書付と賊中に
ありし聞得たる件と具し述べ去三月六日ふ中
谷大尉へ自首せしよし

静岡縣士族

春岡知了

右之者當鎮臺用米買上る者に付取り押へ
吟味のしころ籠城以來音信と通ふ候儀之
れ無く事實明瞭之上解放し賄方等の手傳
申し付候不付可疑者も無之依て證書如件

二月十七日

薩摩本營

右不付處々探偵等申し付られ鎮臺に入り
可來旨被命候ところ是をとも入り込むと
出来兼る旨相断る左すれを長崎へ送る

様子可聞若一長崎の方六ヶ數ハ小倉の方より官兵の様子を見て可来と云金五十四相渡一たりその節左の書付を渡一候事

静岡縣士族

春岡知了

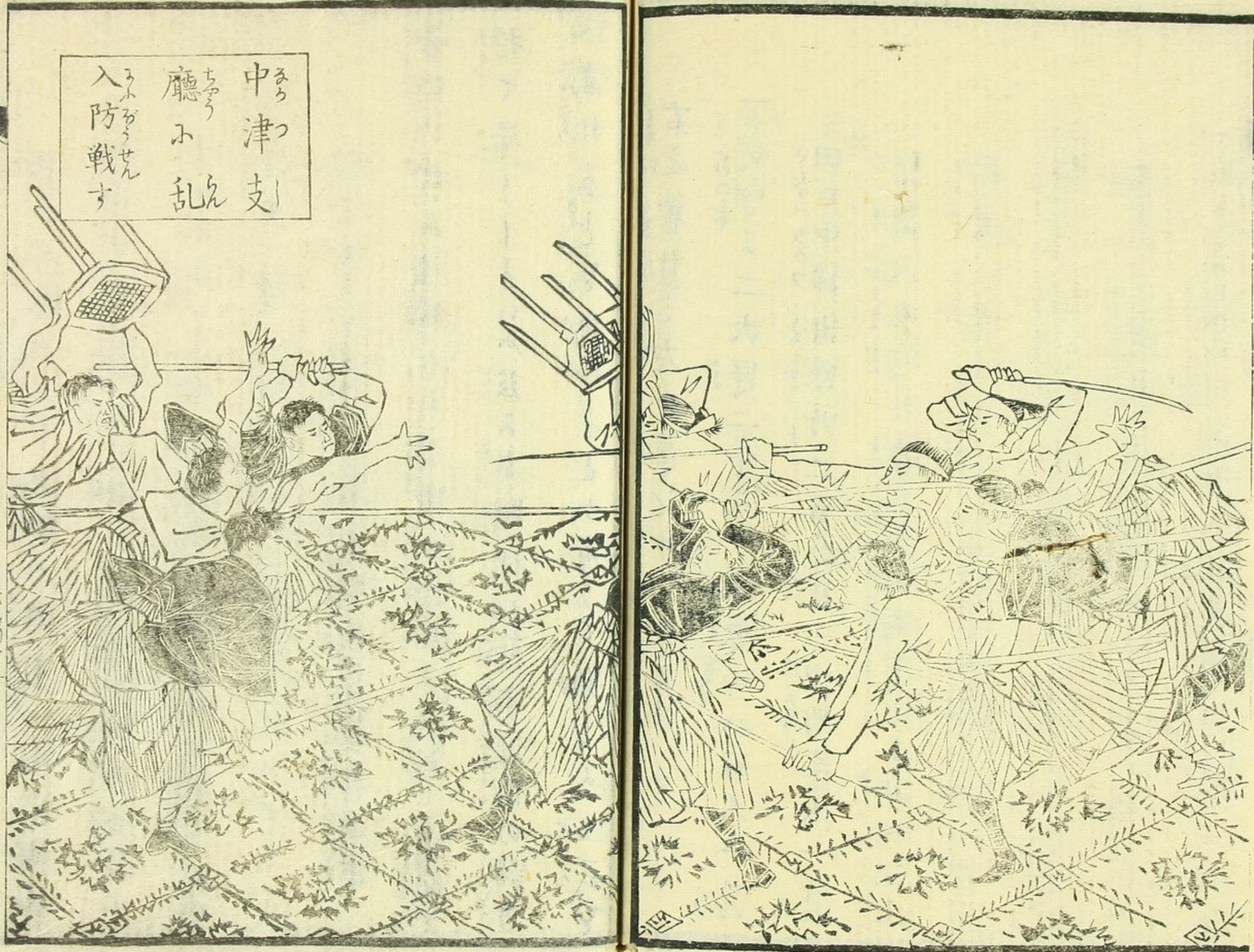
右之者當常用向又付他方へ差出候又付き差通一可被給候也

三月二日

熊本出張 薩摩本營

右之書付と左の事と申一立たり

- 一竹宮又二大隊二千一人一木原山八百人一龍
- 田口中津出張所二百人宛一出町千人一鹿
- 兒島人屯所ハ春日村北岡宮下又西郷池上
- 淵邊仁禮を頭として五十人餘一軒又屯す
- 熊本二本本町二千六百人一近町又本莊春竹
- 屯す一二重峙二千一人本月三日まで賊百二
- 三十人傷ハ凡五百人川尻町寺院七ヶ所と



中津支
廳小乱
入防戦す

借りて病院とす西郷の粹某ハ死す其弟
ハ傷を蒙る桐野の弟も亦傷を蒙り去月十
六日の戦ひハ賊兵即死六十人傷を蒙るりの
三百人餘

右之通り自首候ふ付當分拘留罷在候事

春岡ハ賊ハ捕縛され僥倖ハ彼れより金と書面と
持て歸りとりハ茲亦賊徒ハ熊本近傍の諸方
へ高札まどと掲げりとありて頻りハ土民と

説諭一時人心と得く彼の軍用金ハ各出立の前
家財と賣りたりひ一金及び学校の積金もて成丈
金と違ハざる我音と一食物も之ハ準ずと又賊
軍ハ婦女の隊ありて或ハ千人をり成り或ハ
五百人をりると薙刀と携へ居る女隊の有るる
賊兵の妻妾どもも賊軍の鯨の声を發する時
ハ往々女の声を聞き又遙々ハ望遠鏡みて之と
見たりと我兵卒の話せしより同二十八日早朝よ

官軍の木留と攻撃し一呼みて攻破らん
 頗る苦戦も厭はず攻立されど賊徒の必死する
 りて防戦の術と尽し官軍勇進せしを間道よ
 り賊の出んとする模様ありと奮戦せしかを官
 軍の是の悔りがごとしと進み兼たると見へ午後一
 時に至りても之を取ると能はずして死傷も多
 かりしかを一下先づ一時過ぎ官軍兵と纏めて元
 の陣へと引帰されり同日植木も頗る激戦あり

て午後九時より戦ひ更ふ止ざりとぞ又島
 津從二位の四男島津珍彦と弟忠欽の兩名に内田
 政風有村國彦山本孫四郎の島津家の家令あり外
 小從者の橋口千次倉内十次郎窪田孫助大茂武助
 橋口半五郎川崎宗次郎の面々上京せしあんと
 大有丸ふて三日小長崎へ着せりと直江二級檢
 事補と杉山三級檢事補との鹿兒島縣裁判所
 詰を命ぜられ岸良大檢事の福岡の暴徒を処

分の為め大坂と出立され福岡へ出張と命ぜられ
 たり又東京巡查五百人と檜垣権少警視が率ゐ去
 る三月七日大分縣へ着十一十二の両日竹田と
 滞留十三日より漸々進撃一遂ふ十六日内の牧
 へて戦ひ十八日坂梨の警視本營を突一二重嶺
 の麓の黒川村の賊と攻撃す佐川一等大警部
 へ一小隊と率ゐる間道より進み倉内二等警部
 へ半小隊と率ゐて正面より黒川口より向ひ別よ一

小隊へ二重嶺の本道より檜垣権少警視へ自
 ら三百餘名の巡查隊を將となり峠を通ざる一
 線の間道と採り正奇の兵ふて一撃を賊と破ら
 んと勇進たりしが又秋田縣士族の跡部辰蔵を
 十七人の同志を集めて鹿児島島の賊へ通ト暴徒
 の味方とるさんとせしが嚴重を取り締りがつ死
 逆も事の成りとげられしと思ひ縣廳へ自首及
 びしう福岡縣士族も大勢をあつめ縣の支廳



裁判所敬言察署右三ヶ所と襲ひ公廨を焼き公
金と奪ひ縣官を殺し又廳下へ迫り放火せし其
巨魁は増田宗太郎櫻井貫一郎梅谷安郎の暴徒
は貴島派よりも巧みず町田の黨もあらく官軍より
夫々取締をせしが大坂へ入来るやも知れざと
しと大坂府ふては市中へ左の通り達せられし
よし是は畧文と寫す

第四十一号

市郡區戸長

一昨二十八日福岡縣下早良郡七隅村に於て
同縣士族四五百名嘯集暴動相企よつき
下の関駐在之兵隊直よ出張追討相成り
候ところ忽ち散乱逃去り候同縣油山村に
かさぎ邊に屯集候趣よ付猶昨二十九日再
び追討相成り悉く離散既よ六十四名捕縛
残賊専ら探索中之旨同縣廳より報知これ
有り右ハ素より差たる儀よもこと無候へと

も當節柄之儀も付為心得此旨相達候事

明治十年三月二日 大坂府知事渡邊昇

彼の戦地ハ又一ヶ所の胸壁日向より應トたる者
多く籠りーと見え延岡藩弾薬箱とーるせら由是
賊徒の日向地にて買ひ入れー箱あるが木の葉よ
熊本縣事務所ありて戦地へ差送らるる人夫ハ此
ところより調べ同所浄念寺とふ寺院中又討死
の屍と送り同寺の西南の畠地に埋葬せられしる

又東京巡查八百人と津川一等大警部が引率
て三月三十日午後より熊本地方へ向け出帆一此度
召募の巡查ハ残らず過る二十五六日ごろより向
岡の射的場に於て射的演習とあり同二十九日も
官より戦地へ刀剣を送らるる又戊辰奥羽の戦争
もも度々功と顕したる山口元治ハ當時仙臺鎮
歩兵第四聯隊長陸軍中佐ありしが去る二十七
日陸軍省より至急御用の命ありて東京へ着す

西南太平記
るや否や直ふ戦地出張を命ぜらるたり又賊將
別府逸見が募つたる賊兵の勢ひに何れも帯劍
みて兵器と携え官兵の背より打て出でんと既
出水大口の両口よりすそをたるとして官軍の後備軍
へ一大隊出帆あり土屋陸軍大尉を陸軍教
導團工兵百二十五人と引率し便船次第三月三
十一日夕四月一日の両日の内より東京より神戸へ向
けて出帆すといふ

是より八代口隈川へ官軍進撃し女隊の
激戦ありつる譯の第七編に記載す

明治十年五月一日 御届
 全 十年五月八日 出版

東京堀江町二丁目二番地

安達平七止宿

茨城縣平民

沼尻絰一郎

編輯兼
 出板人

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本各地專賣書籍館

江島喜兵衛

東京
 北畠茂兵衛
 稻田佐兵衛
 山中兵衛
 小林新兵衛
 小善七
 九家善七
 村上勘兵衛
 中村佐助
 牧野吉兵衛
 柳川梅次郎
 水野慶次郎

東京
 林萬次郎
 石川治兵衛
 荒川藤兵衛
 太田金右衛門
 北澤伊八
 朝倉久兵衛
 青山清吉
 鈴木忠藏
 山中孝之助
 山中北郎

東 京 山田藤助
 京 東 山田藤助
 京 東 山田藤助
 西 岡田文龜次郎
 同 岡田文龜次郎
 京 大谷仁兵衛
 同 大谷仁兵衛
 同 永田調兵衛
 同 永田調兵衛
 同 藤井孫兵衛
 同 藤井孫兵衛
 大 柳原喜兵衛
 同 柳原喜兵衛
 同 前川善兵衛
 同 前川善兵衛
 同 吉岡平七郎
 同 吉岡平七郎
 同 松村九兵衛
 同 松村九兵衛
 同 岡田茂兵衛
 同 岡田茂兵衛
 同 梅原龜兵衛
 同 梅原龜兵衛

伊勢四日市 伊藤善太郎
 同 伊藤善太郎
 同 加藤長平
 同 加藤長平
 尾張名古屋 片野東四郎
 同 片野東四郎
 同 栗田東平
 同 栗田東平
 同 矢田藤兵衛
 同 矢田藤兵衛
 同 鬼頭平兵衛
 同 鬼頭平兵衛
 同 三輪伊松次郎
 同 三輪伊松次郎
 同 菅江笑次郎
 同 菅江笑次郎
 三河舉母 菅江笑次郎
 同 菅江笑次郎
 同 岡崎伊藤文次郎
 同 岡崎伊藤文次郎
 同 新城葛家英吉
 同 新城葛家英吉
 同 豐橋高須又八羽前上山
 同 豐橋高須又八羽前上山

東 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七
 京 吉川半七

山岸彌左衛門
 同 山岸彌左衛門
 同 玉井忠造
 同 玉井忠造
 同 西澤喜太郎
 同 西澤喜太郎
 同 伊藤甲造
 同 伊藤甲造
 同 竹内藤吉
 同 竹内藤吉
 同 崎尾新右衛門
 同 崎尾新右衛門
 同 田野邊忠兵衛
 同 田野邊忠兵衛
 同 森萬助
 同 森萬助
 同 齊藤彦太郎
 同 齊藤彦太郎
 同 菅原安兵衛
 同 菅原安兵衛
 同 白木安右衛門
 同 白木安右衛門
 同 本間金之助
 同 本間金之助
 同 高橋庄三郎
 同 高橋庄三郎

同	同	同	駿	同	同	同	同	同	同	同	同	遠	
沼		靜	河	掛	二	見						江	
津		岡	藤	川	侯	附						濱	
			枝									松	
吉	廣	佐	淺	大	天	古	百	一	山	齊	松	落	
成	瀨	藤	井	塚	井	澤	木		下	藤	塚	合	
壽	市	俊	安	好	金	良	健	貫	仁	太	聚	清	
三		兵	五				二		兵	兵			
郎	藏	平	衛	郎	藏	作	郎	社	衛	衛	人	七	
同	同	同	越	同	同	同	同	同	越	同	同	同	
四	葛		後	高					中			山	
谷	塚		長	岡					富			形	
濱			岡						山				
村													
	佐	弦	松	中	車	川	大	中	守	土	中	平	市
	藤	卷	田	村		上	橋	川	川	井	川	田	村
	友	七	周	作	平		甚	甚	吉	宇	久	彌	五
		十			次				兵	三	助	平	郎
	吉	郎	平	平	郎	章	吾	藏	衛	郎	助	治	兵
													衛

010190507675

